阪神・淡路大震災の衝撃
―1995年1月17日午前5時46分から正午まで―

横　山　隆　作

1．はじめに

1995年1月17日午前5時46分，淡路島北部(北緯34度36分，東経135度02分，深さ16キロメートル）を震源とするマグニチュード7.2の「平成7年（1995年）兵庫県南部地震」（気象庁命名）が発生した。そしてこの地震による人的・物的被害を総称して「阪神・淡路大震災」と呼ぶ。

本稿は，阪神・淡路大震災の発生直後から同日正午頃までの間のいくつかの出来事と，被災体験者の証言を中心に，震災の衝撃的状況をあらためて把握しようと試みたものである。[1)]

ところで，当時小生は東京で生活しており，震災を直接体験したわけではない。しかし多くの人々と同じように，震災の報道によって大変衝撃を受けた。その後，震災関連文献を読んで震災の過酷さにしばしば涙し，また毎年１～２回神戸や西宮などを訪れた。2002年9月半ば，快晴の白昼，神戸市長田区内の街路を歩いた。道路両側の店舗・民家などの建物は全て新しく，道路舗装も新しく，なにもかも新しく，まぶしかった。現実の世界ではないように小生には感じられた。大震災という過去は不思議な姿で現在へと変わっていると思った。

2003年の今，淑徳大学に在学中の学生のほとんどは，阪神・淡路大震災発生時に小学生であったから，震災についてはっきりした記憶をもたない。若い人々だけでなく，被災者以外の多くの人々にも震災の衝撃の記憶が薄れつつあるように感じられる。阪神・淡路大震災の記憶を少しでも新たにし，この大災害の貴い教訓を後に伝えるために，本稿を執筆した。

なお，被災者の証言はすべて既に公刊された諸著作より引用しており，新たな事実の発見はなく，また小生の見解にも特に斬新なものはなく，このような研究論文としてのオリジナリティの乏しさについては，あらかじめ読者諸賢に御海容をお願いする次第である。

2．人命被害の概要

阪神・淡路大震災の死者数は，2002年（平成14年）12月27日消防庁発表（表1）によると，震災関連死を含めて6,433名（他に行方不明者3名）である[2)]。ただし，神戸市が2000年（平成12年)1月に発表した被害状況によると，神戸市9区合計の死者数は4,571名で，消防庁発表の

数よりも多く，これは震災関連死者数の違いによる。この神戸市発表の9区別死者数と，消防庁発表の隣接8市および淡路島（2市3町）の死者数を合わせたものが表2である。[3)]

年齢性別の判明している死者6,423名のうち，年齢19歳以下の死者は566名(男性332，女性234)，年齢20歳～59歳は2,100名（男性964，女性1,136)，60歳以上は3,755名（男性1,494，女性2,261）となっており，高齢女性の死者が多い。

表１　阪神・淡路大震災、府県市町別死者数（消防庁、2002年12月27日）[2)]

兵庫県 計 6,401	神戸市4,564　尼崎市49　西宮市1,126　芦屋市443　伊丹市22　宝塚市117 川西市4　明石市10　加古川市2　三木市1　高砂市1 洲本市4　津名市5　淡路町1　北淡町39　一宮町13
大阪府 計 31	大阪市18　堺市1　豊中市9　池田市1　吹田市1　箕面市1
京都府	大山崎町1　　（京都府計1）
2府1県合計　6,433	

表２　神戸市９区・隣接８市・淡路島の死者数[3)]

三木市 1	西区 11				北区 12			宝塚市 117	伊丹市 22	豊中市 9
明石市 10	垂水区 25	須磨区 401	長田区 919	兵庫区 555	中央区 244	灘区 933	東灘区 1,471	芦屋市 443	西宮市 1,126	尼崎市 49
淡路島 62										

この表2は，市区町を地理的位置関係におおよそ合わせて配置しているが，北淡町(淡路島北部）から神戸市須磨区以東の長田区，兵庫区，中央区，灘区，東灘区，そして芦屋市，西宮市，宝塚市，伊丹市南部をつなぐ東西の帯状地域が甚大な被害を受けた。特に須磨区から西宮市までの南側（海岸側の地域）の，ＪＲ在来線とその南の阪神電車の線路の間の地帯が震度7の帯状地域であり，ここでは多数の人命が失われ，恐るべき破壊の惨状が示された。

３．地震発生時　――小学生の証言――

兵庫県西宮市神呪町にある西宮市立甲東小学校4年生のＴＭ君（男子）は，次のように書いている。

「はじめはふつうの地震だったけど，最後の方にすごいゆれになった。空中に体がういた。急いでふとんにもぐった。ガラスがつぎつぎにわれる音がした。地震が終わったなあと思って，立とうとしたら，ゴーンッとまたすごい大きな音がした。」[4)]

神戸市東灘区本山南町8丁目（ここは前述のＪＲ線と阪神電車の間にある）にある本山南小学校に通学する1年生ＮＫさん（女子）は次のように書いている。

『じしんのとき，わたしはじぶんのへやでねていました。ゴーという音がしてガタガタゆれました。ジェットコースターより，もっとすごくゆれました。
「ママこわいよー」とさけびながら，ひっしになってベッドのワクにしがみついていました。じしんがやむと，パパとママが「マイ，キエ」と大ごえでさけびながら，ドアをたいあたりであけて，わたしたちをたすけてくれました。
いえの中はいっぱいものがたおれていました。足がふるえてとまりません。やっぱりママのいうとおり，じぶんのへやでねてよかった。そうでなかったら，タンスの下じきになっていたとおもいます。
まっかなたいようがこわかった。』[5)]

同じ神戸市立本山南小学校に通学する3年生ＯＮ君（男子）は，揺れが収まって外へ出てからのことを，次のように書いている。

『でも，外のこうけいは，もっと悲さんだった。白いけむりのようなものがもうもうとまって，アパートがくずれていた。ぼくたちは，公園に行った。公園は，まっ暗で，毛ふにくるまった人が何人もいた。みんなだまって，ただ立ちつくしていた。お父さんが，かい中でんとうで，時計をてらして，「六時十分だ。」と教えてくれた。初めて朝だったんだとわかった。』[6)]

当日の日の出時刻は午前7時6分と遅く，したがって6時40分頃から街は明るくなって，惨状が明らかになってきた。前記ＮＫさんが言う「まっかなたいよう」とは，粉塵と火災の黒煙が立ちのぼって，朝日が異様に赤く見えたのであろう。この地域の朝の状況について毎日新聞1月17日夕刊の記事が次のように伝えているが，同様の状況はいたるところにあった。

『被害の大きかった神戸市灘区本山南町付近では，道路の舗装が至るところでめくれ上がり陥没。コンクリートの電柱が真ん中からポッキリと折れていた。木造家屋がペチャンコになり，「助けてくれ，生き埋めになっている」との声が飛び交う。』[7)]

同じ神戸市灘区の高羽根町3丁目にある高羽小学校では，ＫＨさん(3年生女子)，ＭＹさん（女子），ＭＫ君（男子）の3名の生徒が亡くなった。この近くに住んでいた小山校長は倒壊した自宅の下敷きとなり，6時間後に生存救出されたが，その後死亡した。[8)]

神戸市長田区二葉町1丁目にある真陽小学校（ここもＪＲ線の南側）に通学する1年生ＫＡさん（女子）は，次のように書いている。

『十七日あさ五じ四十六ぷんに，じしんがおこった。タンスがたおれてきて，おとうとは，下じきになった。ガラスがいっぱいこわれ，ふとんの上はこなごなになったガラスがちらばって，とてもこわかった。たおれたタンスをおとうさんがもち上げて，やっと，おとうとをたすけだした。
そとへいくと，うらのいえが五けんたおれてきて，みちがふさがっていました。おとうさ

んが，「ガスのにおいがする。」といった。

空は赤くてくろいけむりが，いっぱいあがっていた。おとうさんがきんじょのおばちゃんをたすけにいったときに，やねからかわらがおちてきて，あたまをぬいました。』[9)]

このように最初の激震が収まった後も大小の余震が数多くおこった。余震による家屋倒壊で亡くなられた方もいる。そして地震直後に火災が多発した。

神戸市灘区千旦通1丁目（ＪＲ線の北側）にある灘小学校に通学する6年生ＦＴ君（男子）は，同区六甲町1～2丁目の火災（焼失面積19,940平方メートル）について，次のように書いている。

『夜が明け始めて，僕達を呼ぶ声が聞こえたので，お姉ちゃん二人とお父さんとお母さんで相談して外に出てみました。すると，となりの通りで火事があるのがみえました。けっこう遠かったのですが，その火は，「破竹の勢い」とでも言えるようなすごい早さでこっちに向かって来ました。と，思ったら，もう僕の家の三軒となりのＩ君の家まで燃えていました。その時，だれかが下の通りから水をかけてくれました。水をかけて五分くらいした時，風向きが，西向きから，北西――北北西かも――に変わって，火が僕の家と，東どなりの家をさける様にななめ上に行きました。でも，危なくなってきたので，下の通りに逃げました。
≪中略≫

火が近づいて来る時，僕達はあわてていました。向かいの（北側の）アパートのお兄さんが，三人も下じきになっているのです。そのお兄さんを助けるために，そのアパートに住んでいたお兄さんが，す手でがれきをのけていたので，金づちや，ドライバーやのこ切りを貸してあげました。一分や二分の時間が，十分にも二時間にも感じられました。火が，すぐそこまで近づいて来ました。この時に僕達は逃げました。家やお兄さんたちは心配だったのですが。僕は知らなかったことですが，助けていたお兄さん達は，アパートに火が移ったので，がれきはほとんどのけて，もう声も聞こえた人もいたらしいのですが，「ごめん……。」と言って逃げたそうです。≪中略≫

僕の家は燃えているはずでした。でも木のおかげで燃えませんでした。生木は燃えにくいのです。向かいのアパートが燃えている時，火の粉が飛んで来ましたが，燃えませんでした。でも風向きが90度逆の僕の家に火が来ていれば，お兄さん達が助かったかもしれませんでした。』[10)]

この日はほぼ無風といってよい気象条件であり（黒煙がまっすぐにのぼっていた），火災延焼速度は1時間に20～30メートル[11)]であって，かなり遅いほうであったと言えるが，しかし被災者や消防署員の実感では，火災の広がりは急速であったといえよう。

児童福祉施設も被災した。神戸市兵庫区湊川町にあった神戸母子寮には，当日母子33名と職員1名が在寮していた。木造2階建ての1階が崩壊して，10人が生き埋めとなった。6人は生

存救出されたが，7歳と4歳の姉妹が亡くなり，また別の母親2名が亡くなり，職員の阿部久子氏（67歳）と合わせて5名が死亡した。[12)]

神戸市長田区前原町の養護施設「明星寮」では，地震発生後，生活寮の寮生が屋外に避難した直後に裏の崖が崩れ，民家が寮に崩れ落ちてきた。2月7日にはまた崖崩れが発生して事務棟もつぶされた。幸いなことに入所者および職員は全員無事であった。[13)]

4．巨大破壊現象

この地震による建物の被害は，住宅家屋の損壊・焼損が合計約52万棟，同じく非住宅は5,800棟（内15パーセントが公共施設）である。住宅家屋の被害の内訳は，全壊約10万5千棟，半壊約14万4千棟，同全焼6,148棟，半焼69棟と報告されている。[14)]しかし半壊以下の軽い損壊とされる建物でも建て直さなければならなくなった場合が少なくない。

西宮市仁川百合野町（関西学院大学の北西）では，仁川の南の斜面が幅100メートル，高さ100メートル（最大地点）にわたって地滑りをおこし，家屋13戸をおしつぶした。救出は難航し，17日の夕方6時までに30名が死亡して発見され，結局12世帯の34名が死亡した。[15)]

この仁川百合野町の斜面崩落はもっとも被害の大きかったものだが，神戸市，芦屋市，西宮市，宝塚市などの六甲山の斜面に造成された宅地では，6,000箇所（概略の推計）にも上る多くの斜面崩落や宅地地盤破壊がおこった。山側を通る道路では大量の落石があり，走行中の自動車を直撃した例もあった。

山陽新幹線では，兵庫県内9カ所で高架線路の橋桁が落下・段差発生・横ずれなどをおこした。橋桁どうしは鋲着などで接合されていないためである。また新幹線の高架橋脚柱が多数破損したが，この原因の一つに，昭和55年（1980年）耐震設計基準以前の建設，すなわち1960～1970年代に建設された橋脚のコンクリート強度が十分でなかったことがあげられる。

私鉄各線の被害も甚大であった。阪急電鉄伊丹駅のホームと2～3階建ての駅ビルが崩壊し，ホームに停車していた車両が地表付近まで垂れ下がった。この駅ビル1階北端の派出所に勤務していた2名の警察官が生き埋めとなり，1名は救出されたが，辻恭孝警部補（当時巡査部長，50歳）が殉職した。阪急電鉄岡本駅・御影駅間では，線路擁壁が大きく崩れ，復旧に時日を要した。神戸高速鉄道東西線（地下鉄）大開駅付近では，コンクリート柱がせん断破壊し，地下の線路・ホームがまったく使用できなくなった。地下鉄ではここと同様の，地表からトンネルを溝状に開削し，後から空間を盛り土して埋める建設工法の部分に被害が大きかった。阪神電鉄大石駅（灘区）の東では，走行中の電車が脱線・横転した。鉄道各線で乗客の被害が少なかったのは，地震発生時刻が未明であって，乗客数・運行車両数がまだ少なかったことによるものである。

道路には亀裂，陥没，段差が多数発生し，水道管から水が噴出した。高架道路のコンクリート橋脚，鋼製橋脚が多数破損した。そのため西宮市内，阪急門戸厄神駅南の国道171号線陸橋が落橋した。また灘区内，阪神西灘駅南の，国道2号線と国道43号線が接続する地点の陸橋が落橋した。

そして東灘区深江本町付近の国道43号線上に建設された阪神高速道路（1967年～1970年に完成したもの）が，長さ635メートル（単支柱形式35メートル間隔の支柱18本）にわたって横倒しに倒壊した。この時，この下の国道43号線をＯＮ氏（59歳，女性）とＯＳ氏（28歳，男性）の親子が軽トラックで走行していた。ＯＮ氏親子は西宮市甲東園駅前で鮮魚店を営んでいる。二人は5時25分頃店を出て，東灘区深江浜町の東部市場へ仕入れに向かう途中であり，国道43号線海側車線を走行していた。二人は次のように話している。

『ＯＳ　　芦屋の川を越えたあたりで一番左の車線を走っていたら，高速道路の電灯というかランプが急にババーンと光って稲妻みたいに強い光であたりが真っ白になったんです。ショートでもした感じで，どうしたんやろと思いました。そのすぐあとで縦揺れというか車がものすごく揺れて，オフロードを走っているというかまっすぐに走れない状態になったんです。……

（インタビュアー）――お母さんもご一緒だったんですね。

母　　ええ，いつもの習慣で隣に乗ってたんですけど，この子，何て変な運転するんやろうと思いました。岩を乗り越え乗り越え行くようで，上がったり下がったり，なんてむちゃなと思って顔を見たらすごく真剣な顔をしているんですね。……

ＯＳ　　周りは結構車が走っていましたんで，まず車に当ててはいけないと思って，それでも大きな波板の上を走っているようでハンドルとられてまっすぐ走れないんです。……

母　　私は助手席に乗ってたでしょう。右にも左にも大型車が走っていてそのお尻だけ見てたんです。右にずーっと寄っていって「ワー当たる」と思うとすーっと離れて，こんどは左に寄ってぶつかりそうになってその繰り返しで本当に怖かったですよ。揺れと同時に砂やらコンクリートの塊がバンバン，トラックの上に降ってきたんです。それが白いんで思わず「や，大きな雹が降ってきた」と叫びました。

ＯＳ　　同時に煙というか霧というか，辺りが真っ白になって一寸先も見えないようになったんです。揺れも大分収まってきたので車を左に寄せて止めました。その後数分は何も見えなかったです。

母　　そのうち少しあたりが見えるようになって息子がドアを開けて外に出たんです。出るなり「高速が無くなってる」と言うでしょう。無くなってると言われても何のことか意味がわからなかったんです。ピンとこなかった。

ＯＳ　　車から出てパッと見た時，高速が横倒しになってなっているんです。「ああ，反対

側に落ちてるわ」「柱が向こうに曲がってるわ」と，山側の方に倒れているのが分かったんです。それでも地震とは思わなかった。……

（インタビュアー）――高速が落ちた時にはものすごい音がしたと思いますけど。

ＯＳ　したかもしれないけど分からなかったですね。車の中にいると石が降ってくる音の方がバンバン激しかったですからね。後で見たら大小たくさんの塊が屋根にもボンネットにも荷台にもいっぱい落ちていて，大きいのは直径30センチ位もありました。そのせいか高速の落ちる音を聞いてないんです。』[16)]

海岸線の埋め立て地全域および神戸港では，造成された地盤や護岸が多くの箇所で崩壊した。神戸市兵庫区中之島にある神戸市中央卸売市場の鮮魚部では，その時，朝のセリが終わりかけていた。鮮魚部副部長のＡＭ氏は，ドーンという音の後，市場の天井が落ちそうなほど揺れたので，屋根の下から海岸寄りへ10メートルほど逃げた。市場の建物の海側の地面が地割れして，幅1ないし1.5メートル，深さ2メートルぐらいの亀裂が生じた。市場の外の岸壁が30ないし50センチメートル沈下した。[17)]

この地震によって西は姫路港から東は尼崎港まで24港が被害を受けた。ことに神戸港では，岸壁の80パーセントが陥没し，全239バース（埠頭）中230バースが使用不能になった。ただし摩耶埠頭の耐震強化岸壁はほとんど損傷がなかった。[18)]

ポートアイランド（埋め立て造成の島）と神戸市中心部とを結ぶ神戸大橋の道路接合部に1メートル近くの段差が生じて，交通止めとなった。さらに新交通システム・ポートライナーの高架線路の橋桁の一部が落下し，ポートアイランドは孤島となった。そのためポートアイランドにある神戸市中央市民病院は，大規模災害時の緊急傷病者受け入れ施設に指定されていたにもかかわらず，この役割をはたすことができなくなった。停電のため，人工呼吸器を手動で動かし続ける作業が59時間（最長のケース）も続いた。その後21日に神戸大橋が通行可能になってから，中央市民病院は多数の患者を受け入れたが，上水道断水のため，手術などが困難であった。ポートアイランドの地表では，激しい液状化現象で水と泥が噴出し，ほとんど全地域が泥沼のようになった。ビルの地下室にも水が大量に噴出し，地下に設置されていた非常用発電設備などが動かなくなった。

上水道管は地下のいたるところ無数の箇所で破損し，兵庫県10市7町の全給水戸数の9割，約127万戸が断水した。下水道も同様に大きな被害を受けたが，マンホールの浮き上がり現象は今度はあまり多くなかった。

配電用電柱が多数倒れたが，その8割は家屋などの倒壊によって引き倒されたものであった。ただし一部には電線の振動によって倒れたケースもある。変電送電施設の損傷ともあわせて兵庫県と大阪府の約260万戸が停電した。

電話は，建物の加入者ケーブルの損傷と，停電による交換機作動停止により，兵庫県南部

地域の約29万回線（全体の約2割）が使用不能になった。地震後の緊急連絡，安否確認，受話器はずれ等によって，通話量が激増し，電話交換機は機能していても電話がきわめてかかりにくくなった。神戸地域への電話通話量は17日には通常ピーク時の50倍に達し，翌18日にも20倍に達した。

都市ガスも地中配管等が多大の損傷を受けた。しかし大阪市中央区にある大阪ガス本社からの送ガス停止命令は，17日午前11時30分になってようやく発令された。この遅れは，大阪ガス本社では通信途絶によって被害の重大性をすみやかに認識できなかったことによる。[19]ガス管内の残留ガスはガス管の破断によって噴き出し，火災のおきた地域では17日深夜になっても多数の火炎が噴き上がっていた。

この地震で全壊した建物は，神戸市だけでも6万7千戸以上に達した。一般に古い建物ほど壊れやすかったとは言えるが，各戸ごとに見れば，どうしてこちらが全壊し，こちらが比較的軽微な損壊であったかよく分からないケースが多々あり，被災者に不条理の感を抱かせた。

震度7地帯から山側海側双方向へのわずかな距離の開きが建物損壊の程度に大きな差をもたらした。例えば，神戸発祥の地である中央区下山手通1丁目の生田神社（阪急三宮駅の北西約300メートル）では，拝殿が完全につぶれ，鳥居2基が倒壊した。しかしここから北へ約1キロメートルしか離れていない新幹線新神戸駅そば（中央区加納町）に立つ37階建ての新神戸オリエンタルホテルでは，最上階のレストランで皿が落ちて割れたぐらいの被害で，家具も倒れず，ホテル従業員も約250人の客も，朝7時頃の時点では，巨大災害であるという認識を全く持っていなかった。[20]

5．救助活動・消火活動

朝6時，まだ暗いなか，無事であった人々は，建物の下敷きになっている，あるいは閉じこめられている人々の救出活動を始めた。これらの自力で脱出できずに近所の人々によって救出された人々の数はおそらく数万人に上るであろう。

芦屋市に住む神戸大学精神科医師岩井圭司氏は，6時半過ぎ，妻子とともに近所のコンビニエンス・ストアに緊急の買い物に行った。

『レジの長い列に加わって十数分，あと二三人で私の番というときになって，寝巻姿の中年女性が店に飛び込んできた。「助けてください！　こどもとおばあちゃんが生き埋めになっているんです!!」という叫び声に応じて，私は数人の男性客とともに表へ出た。

店からわずか数十メートルのところにある古い木造民家の二階建て部分が倒壊していた。その家の夫婦は平屋部分で寝ていて難を逃れたらしい。

私たちはバール一本とスコップ二本を除いてほとんど素手で掘り進んだ。結局，三時間ほどかかって三人のこどもと祖母を救出した。四人とも捻挫打撲程度の外傷ですみ隣家に収容

されたが，念の為に119番しようとしたところ電話が通じない。……≪中略≫……近くの公衆電話を手にしたがやっぱり通じない。そこで初めて，私は自分の手が血まみれであることに気がついた。ズボンにもたくさんの鉤裂きができていた。』[21]

消防署や警察署には，生き埋めになった人や重傷を負った人々の救助を求めて多数の人々がかけこんできたが，ただちに出動できる消防署員や警察官の数はあまりに少なく，救助機材の備蓄もほとんどなかった。兵庫県警東灘警察署では，地震直後から菅井功署長（55歳）が署内で指揮をとったが，当直署員は交番勤務をあわせて46名（総員213名中）にすぎなかった。次々と参集した署員も即刻街に出動してゆき，正午には署長他5名しか署内にいなかった。[22]

兵庫県警察本部交通部交通規制課次席の植村勝氏は，神戸市須磨区（地下鉄妙法寺駅近く）の自宅を７時頃に出て，徒歩で元町駅の西にある兵庫県警交通管制センター（兵庫県庁の南）に向かった。交通管制センター到着は９時ごろである。途中，８時半ごろ，兵庫警察署の前を通ると，署の1階がつぶれていて，1階のひさしが地上1メートルぐらいまで落ちていた。建物の前には「兵庫署長が仁王立ちに立っていました。」[23]

芦屋市の北部山麓，剣谷地区にある兵庫県警察学校では，17日午前8時30分，29名の初任科生（配属前研修中の警察官）と警察学校教官とによって臨時の機動隊が編成され，芦屋警察署（阪神芦屋駅の北）に移動し，生き埋めになった人々の救助活動を開始した。[24]

震源にもっとも近い淡路島北部の兵庫県津名郡北淡町（町民約1万1千名）では，死者39名をだし，全壊した家屋は約3分の1にも達した。北淡町6地域の消防団565名は，地震直後から個別に自宅近くで生き埋め者救出を行い，9時半前後から組織的に活動を始め，昼前に被害がもっとも大きかった野島地区と宮島地区へ集中して救助活動を行った。住民同士が日頃からお互いの家の様子を知っていたため，300名以上の生き埋めになった人々をその日の内に発見・救助し，17日夕方6時には行方不明者ゼロと確認された。[25]

震度7地帯では誰も思ってもみないほど多くのコンクリート造りのビルが挫屈崩壊し，傾き，亀裂が生じ，少数ながら横倒しになったものもあった。ビル構造上の弱点が露呈したのは，ピロティ（壁のない広間）や吹き抜けであった。見た目ではひどく危険に思えるガラス外壁は案外堅牢であったが，普通のガラス窓の破損はきわめて多かった。

神戸市長田区一番町2丁目にある神戸市立西市民病院（370床）では，鉄筋6階建ての本館（西棟）5階の内科病棟がつぶれ，入院患者44名と看護師3名が生き埋めになった。外から見ると5階の天井と床がくっついており，全員死亡も危惧された。レスキュー隊は午前10時に到着し，鉄筋コンクリートの障害物を切除しながら救出路を開いた。鉄製パイプのベッドの手すりなどが落ちてきた天井を支え，床との間に50センチメートルないし1メートルの隙間を作ったため，17日正午までに6人が生存救出され，残りの人々も同日夜までに奇跡的に救助された（既に死亡していた患者1名は18日に搬出された）。この5階に閉じこめられた看護師ＦＨ氏（女性）

は，17日午後2時頃救出されると，すぐに応急処置の職務に就き，2日間病院に泊まり込み，3日目に帰宅したが，翌朝には仕事に復帰した。このように，破壊された西市民病院にも多数の負傷者が治療を受けに来て，医師と看護師は白衣を血で染めて奮闘した。翌18日午前中には133名の入院患者は18カ所の病院へ転院した。[26)]

地震発生直後から火災が同時多発していた。神戸市では，17日に109件（朝6時の時点で60件），18日14件，19日15件の合計138件の地震を原因とする火災が発生している（兵庫県全体では260件）。

焼失面積1万平方メートル以上の大規模火災12件（すべて神戸市内）を表3にあげる。[27)]

表3　大規模火災地域（消防庁発表）[27)]

地域（火災名称）	焼失面積
①長田区水笠公園付近・須磨区千歳小学校付近火災	10万6千平方メートル
②長田区高橋病院付近火災	6万9千平方メートル
③兵庫区会下山下南火災	6万2千平方メートル
④長田区菅原変電所周辺火災	5万5千平方メートル
⑤長田区新長田駅南火災	4万平方メートル
⑥長田区神戸デパート南火災	3万5千平方メートル
⑦長田区西代市場周辺火災	3万4千平方メートル
⑧長田区御蔵通5・6丁目火災	2万2千平方メートル
⑨灘区六甲町1・2丁目火災	2万平方メートル
⑩長田区御船通2・3・4丁目火災	1万6千平方メートル
⑪兵庫区湊川町2丁目火災	1万2千平方メートル
⑫東灘区魚崎北町5・6丁目火災	1万平方メートル

神戸市全体の焼失面積63万5千平方メートルの内，長田区が30万3千平方メートル，兵庫区が13万平方メートル，須磨区が9万平方メートル，灘区が6万5千平方メートル，東灘区が3万3千平方メートル，中央区が1万4千平方メートルとなっており，長田区の火災被害がもっとも大きかった。

地震発生時に出動体制にあった神戸市の消防部隊は，80隊，292人（ポンプ車22台，タンク車7台，救助車11台，救急車27台，特殊車13台）であった。消防署職員総数1,384名の大半が自宅で被災したが，17日正午までには9割の職員が参集した。神戸市消防局管制室は，火災通報（119番等）に対応して，市内各署に出動要請を行っている。午前6時20分，市内全域で火災発生と判断した管制室は「一次的な車両運用を各署に任せる」という指令を出した。つまり各署で臨機に対応せよという非常事態宣言である。[28)]

火災焼失面積第5位の新長田駅南火災は，地震直後に長田区若松町3丁目で出火し，北へ延焼していった。6時02分には長田署の消防車1台が到着したが，上水道管破断により水圧が低下し，消火栓から水が出ず，初期消火が不可能になった。消防隊は取水源を防火水槽に移し

たが火勢は強まり，9時頃には南側の大橋町3丁目に飛び火し，さらに大橋町4丁目へと延焼した。10時には南西側の若松町4丁目に飛び火した。若松町4丁目は木造長屋の密集地域であり，当時は無風に近い微風という天候であったにもかかわらず，急速に火災が拡大した。この地域は，北西に新長田駅，南西と南東を幅の広い道路が区切っており，北東へは飛び火延焼しなかった（風向きによる）ため，若松町3・4丁目，大橋町3・4丁目を焼け野原状態にした後鎮火した。神戸の他地域の大火と共通する原因は，出火直後の火勢が弱い時に水が出なかったこと，火災多発に対して消防車が少なすぎたことがあげられ，またこの新長田駅南火災の地域的特徴として，木造家屋が多かったということがあげられる。

火災焼失面積第2位の長田区高橋病院付近火災は，地震直後に日吉町5丁目と若松町10丁目の2地点から発生した。この2カ所とも北西・南東方向の通りの商店街アーケードに面していたため，火災は6時40分頃には北西のＪＲ高架線方向に延焼した。その後8時20分頃には若松町10・11丁目，日吉町5・6丁目，大橋町10丁目のほとんどの地域が火災となり，さらに9時30分以降は南西の海運町3丁目（鷹取カトリック教会はここの南西端にあり，焼けなかった）と海運町2丁目（高橋病院がある）へと延焼していった。消防隊の消火活動は午後になってから開始され，夜になって鎮火した。[29)]

高橋病院の高橋玲比古院長（39歳）は，須磨区離宮前の自宅から徒歩で病院へ向かい，午前7時前に病院に到着した。高橋病院では当直医によって入院患者の避難準備がすでに始まっていた。近くで火災が発生していることは分かっていた。7時ごろには多数の負傷者が高橋病院へ担ぎ込まれ，高橋院長はその手当てにおわれ，避難の指揮まで手がまわらなかった。

地元住民ＹＳ氏（46歳）がリーダーとなって，人手を集め，歩ける人は歩いて，歩けない傷病者は，横臥のまま乗せられるものならなんでも使って，大国公園へ避難した。避難を始めた8時ごろ，より海側の町から，多くの人がこちらの地域の被害の様子を見に来ていたという。

ＹＳ氏は震災直後から13人もの生き埋めになった人を救出した。そのなかで，小学校2年生を家屋の下から救出したが，ほとんど呼吸停止の状態であった。高橋院長は，病院のガラス窓が火災・火炎の接近によって破壊されるぎりぎりの時まで，この小学生の酸素吸入を続け，最後に避難した。いったん大国公園に避難した約500人は，火事がさらに接近したために，鷹取駅前の浪松保育所とその周辺に避難した。この避難は11時ごろに終わったが，またもや火災が迫ってきたので，西方500メートルの鷹取中学校に避難し，夕方5時半ごろまでに避難を終えた。[30)]

６．被災者救援のはじまり

兵庫県消防交通安全課防災係長の野口一行氏（43歳）は，地震後まもなく神戸市西区の自

宅を車で出て，6時45分に兵庫県庁（神戸市中央区）に到着した。当日は日の出が7時6分であり，まだ暗く，出勤途中ではあまり被害状況は分からなかったが，県庁に入って被害の大きさに驚いた。12階の課の部屋には壁の裂け目から入った。すでに電話が鳴り続けていた。兵庫県庁への電話は，このころまでは通じたが，その後回線輻輳のため，ほとんどつながらなくなったようである。野口氏は，まず電話の応対に忙殺されたが，個別の問い合わせに対しては答える情報がなく，「わかりません」を繰り返すほかはなかった。その後野口氏は不眠不休で対策に当たることになる。「震災から三日間は，本当に，ほとんど何も覚えていないんです」と野口氏は回想している。

6時50分，兵庫県庁幹部としてはもっとも早く，副知事の芦尾長司氏（60歳）が県庁舎に到着し，災害対策本部設置の準備を始めた。なお芦尾氏は，1979年から1982年まで静岡県庁災害対策担当部長であり，震災対策立案の経験があった。[31)]

陸上自衛隊の中部方面隊・第3師団・第3特科連隊（砲兵隊），約1,000名は，兵庫県姫路市峰南町に駐屯している。この部隊の「警備」範囲は兵庫県（西宮市以東を除く）であり，神戸市への災害救助はこの部隊の担当である。自衛隊が災害救助に出動するためには兵庫県知事の派遣要請が必要であるが，地震発生の後，兵庫県庁との連絡がつかなかった。

自衛隊中部方面隊と第3師団の総監部は兵庫県伊丹市にある。こちらでも地震後しばらくは被害の大きさが分からなかった。6時35分，駐屯地近辺の被害状況などを判断材料として，こちらの第36普通科連隊が「近傍派遣」（駐屯地近辺の災害などに緊急に対処すること）の形式で，伊丹駅，西宮市などに救助活動にむかった。

姫路の第3特科連隊では，6時50分に災害出動のための第3種非常呼集（全員出動）を指令した。姫路の連隊は7時30分，連絡ジープ3台を3ルートから神戸方面に偵察に出した。交通渋滞のため，このうちの1班が兵庫県庁に到着したのは午後2時過ぎであった。

午前8時10分，姫路の連隊と県庁防災係長の野口氏との電話連絡がとれたが，明確な出動要請はなかった。つまり8時ごろでは，県庁の側では知事と連絡がとれておらず，災害の状況も十分把握していなかったのである。貝原俊民兵庫県知事は8時20分に県庁に到着した。貝原知事の登庁の遅れは，中央区中島通の知事公邸がＪＲ灘駅の北西約1キロメートルのかなり山側の位置にあり，付近では被害が少なかったことと，徒歩で県庁に向かったのでは，約3キロメートル弱の道のりの途中，連絡が取れなくなることを危惧したことなどの理由による。

10時10分，姫路の連隊と県庁の野口氏との電話が通じ（2度目），野口係長が口頭で派遣要請をした。ほぼ同時刻に姫路の連隊が派遣したヘリコプターが県庁屋上に着陸し，第3特科連隊副連隊長と広報室長が，兵庫県災害対策本部で県からの派遣要請を受け取った。10時15分，姫路の連隊215人が駐屯地を出発した。[32)]

17日午前11時，兵庫県朝来郡山東町の町長・職員は，救援食料のおにぎりを作り始めた。

正午，山東町役場は，緊急に買い集めたパン1,000個，牛乳1リットルパック200本，その他のペットボトル入り飲料などを満載した4輪駆動ワゴン車を，西宮市役所へ向けて出発させた。ワゴンは午後3時に到着し，おにぎりは近くの西宮市中央体育館に避難していた被災者に配られた。これが周辺自治体からの最初の被災者救援であった。[33)]

東京ではテレビ報道などが地震被害の大きさを伝えていたが，17日午前中にはまだ詳細は不明であった。村山富市首相のもとへ届いた情報は，17日正午過ぎに死者190人，すぐに訂正で203人と報告された。村山首相は驚愕し，さらに顔色が変わって黙り込んだ。[34)]

この死者数は警察が検屍を終えて発表した公式の死者数である。実際は（推定であるが）すでに5,000人以上の死者が出ていたのである。検屍によれば，これらの即死に近い死者の死因の大部分が，圧死（圧迫による窒息死を含む）や強い打撃によるショック死であったと考えられる。

警察庁発表では，1月18日昼12時45分には死者2,014人，1月18日23時45分には死者2,872人であった。[35)]

7．結語　――地震直後の危機――

なにがおこったんだ，いったい今，何がどうなっているんだろうか？　これからどうしたらいいんだろうか？

これが地震直後に多くの人々が陥った主体の（主観的な）危機である。少し説明を加える。第一に，発生した事態，すなわち住宅・建物を破壊するほどの大地震であることが，被災者自身にとっても，しばらくは分からない。人間は自分の過去に経験したことがらと新しい経験とをつきあわせて理解する。過去の経験の範囲を超える未経験の事態を認識するには理性的判断が必要であり，これには時間がかかる。

自宅と近所の被害状況を見て，それによって事態を判断するというのは，当たり前のことのようで，実は難しいことである。被害の軽微であった地域の住民の多くは地震被害全体を軽く考えた。一方，家屋が全壊するなど深刻な被害を受けた人々は，家族の安否を確かめ，生き埋めになった人々をただちに救出すべく全力を尽くしたが，これは緊急の対応であり，必ずしも事態全体の正確な判断と結びつくものではない。少し時間がたってから，何がどうなっているのか分からないことにあらためて気づくのである。自分と自分を含む広い範囲の状況を啓示する情報と，それをもたらす通信が途絶しているからなのである。地震の後，自家用車のラジオなどで，今のは地震だったと分かったという人は多く，また東京など他地域の知人と電話連絡して，初めて被害の深刻さに気づいた人も少なくない。

第二に，安全・確実な行動方針がないことである。人々は安全な場所に避難しようとする。しかしどこが安全なのかは，全体の状況が分からなければ分からないことである。既定方針

として，公共施設などが避難所とされているが，そこへ行くことができるのか，そこは安全なのか。人々は困惑する。

このような主体の危機を未然に防止する方法は無い。一方で，地震による人身・建造物等の破壊の程度，すなわち客観的な危機は個別まちまちであり，偶然的であると言ってもよい。被災者の主体の危機と客観的危機とを合わせて，地震直後の第一次的危機について考えれば，これを予防する方法は無いものと考えざるをえない。では，できないことは考えないということでよいのだろうか――いや，そうではあるまい。直接的経験でなく，文字による知識であっても，大震災について知ることは大切であり，ここから対策が始まるものと考える。

注）

1）被災者の証言を引用した場合，原著において実名であっても，本稿においてはアルファベットの仮名とした。ただし公職に就いていた証言者の場合は実名とした。また原著において既に仮名の場合もある。また原著において改行されている文章を，改行せずにつなげた場合がある。

2）表２は，自治省消防庁災害対策本部作成資料，『近代消防』2000年2月臨時増刊号掲載のものが，消防庁ホームページ内『防災白書平成11年版』として掲載された電子文書をもとに，より新しい新聞報道による死者1名を合わせて作成したものである。

3）「平成7年兵庫県南部地震の概要」（電子文書）http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/013/report/1-2-j.html

4）震災をつたえる会編『大震災にあった子どもたち　4年生』小峰書店，1996年，98頁。

5）同『大震災にあった子どもたち　1年生』45～46頁。

6）同『大震災にあった子どもたち　3年生』7～8頁。

7）毎日新聞大阪本社編『「毎日新聞」が伝えた震災報道１２６０日』六甲出版，平成10年，112頁。

8）前掲『大震災にあった子どもたち　1年生』12～13頁。

9）同『大震災にあった子どもたち　1年生』34～35頁。

10）同『大震災にあった子どもたち　6年生』38～41頁。

11）消防庁編『阪神・淡路大震災の記録』第１巻（全4巻），ぎょうせい，1996年，164頁。

12）震災モニュメントマップ作成委員会『阪神・淡路大震災――希望の灯りともして』どりむ社，2001年，126頁。松田美智子編著『愛の奇蹟　阪神大震災』早稲田出版，1995年，23－27頁。なおその後，この法人は神戸福祉会となった。

13）神戸新聞社『大震災　その時，わが街は』神戸新聞総合出版センター，1995年，78～79頁。

14）阪神・淡路大震災教訓情報分析・活用調査委員会編「阪神・淡路大震災教訓情報資料集　平成11年度報告書」（財）阪神・淡路大震災記念協会，第1期・初動対応，Ｉ．被害発生，Ｃ．建築物の被害，8頁。この資料は，http://www.hanshin-awaji.or.jp/kyoukun/index.htmlの下の「報告書ダウンロード」にあるPDF電子文書である。

15）前掲『阪神・淡路大震災――希望の灯りともして』220頁。

16）横山義恭『31人の「その時」』1995年，彩古書房，107～109頁。

17）同『31人の「その時」』115～116頁。

18）前掲「阪神・淡路大震災教訓情報資料集　平成11年度報告書」初動対応，1.被害発生，F.港湾・河川・産業施設の被害，27頁。

19）前掲『大震災　その時，わが街は』169，204～205頁。

20）前掲『31人の「その時」』240～242頁。
21）岩井圭司「災害地の精神科医」，中井久夫編『1995年1月・神戸』みすず書房，1995年，165～166頁。
22）前掲『大震災　その時，わが街は』111～112頁。
23）屋久哲夫『その時最前線では』東京法令出版，平成12年，73頁。
24）前掲『大震災　その時，わが街は』111～113頁。
25）藤本幸也『心の断層』みすず書房，2002年，193頁。なお消防団とは別に，消防署員は淡路広域消防事務組合北淡出張所の15名がいた。
26）外岡秀俊『地震と社会――「阪神大震災」記』上巻，みすず書房，1997年，159～162頁。
27）前掲『阪神・淡路大震災の記録』第１巻，168頁。ただしこれらの火災は，出火地点が複数であっても一つの火災としてまとめた場合がある（消防庁発表）。
28）前掲『大震災　その時，わが街は』90～91頁。
29）前掲『阪神・淡路大震災の記録』第１巻，147～150頁。
30）前掲『心の断層』136～181頁。
31）同『心の断層』16～19頁。
32）同『心の断層』23～56頁。
33）同『心の断層』97～116頁。
34）同『心の断層』61頁。
35）前掲『「毎日新聞」が伝えた震災報道１２６０日』117頁。

The Hanshin Awaji Earthquake Disaster

—January 17th 1995, from 5:46a.m. to 12:00noon—

Ryusaku YOKOYAMA

At 5:46 a.m. on January 17th 1995, an earthquake in the southern part of Hyogo prefecture occured. The seismic intensity was Magnitude 7.2, and the highest intensity of earthquake level of vibration or destruction was 7.0 on a scale of 10. And the total damage caused by the earthquake is called "the Great Hanshin Awaji Earthquake Disaster".

A total of 6,433 persons including the earthquake related death were killed, of which 4,564 persons died in Kobe city, 1,126 in Nishinomiya city, and 443 in Ashiya city.

About 52,000 units of residential homes and 5,800 units of non-residential buildings were destroyed. 635 meters of the elevated motorway (Hanshin Kosokudoro) fell to the ground in the Higashinada ward of Kobe city.

60 fires occured in Kobe city soon after the earthquake, and some towns burned until midnight, and a total area of 635,000 m² was burned out in Kobe city. Fire fighting was not effective because all the water pipes of the fire plug were broken by earthquake.

This paper picks up some testimonies of this disaster from pupils of primary schools, a mother and her son who were involved in the motorway collapse, doctors, public officials and others. They talked to us about the shock of the disaster.

Immediately after the earthquake shock, people fell into panic and confusion. "What happened !?" and "What can I do !?" We can not prevent this first crisis, but we have to know more about the great earthquake disaster.